

2021. 11. 14. 主日礼拝説教  
聖書：マルコによる福音書2章18～22節  
『『いのち』を生きるとは何か』

「いのち」とは、つきつめていうならば、わたしたちに与えられた時間なのです。そして、その「いのち」を生きるとは、与えられた時間を自分のためだけでなく、他者のためにどれだけ使っているのかという深い問いかけなのです。

さて、本日の聖書の箇所が登場するのは論争物語集の中から断食についての問答です。戦前から戦後の混乱期に食べるものが充分でなかった時代を生き抜いて来られた方は、食べものがないという空腹によるひもじさを身にしみて経験されたと思います。しかし、断食とは自分の意志で食べものを摂ることを一定期間にわたって一切断つということです。これは古今東西を問わず世界中で広く行われた宗教的行為かと思えますし、宗教のみならず現在でも抗議や主張の手段としてハンガーストライキという形で行われてもおります。

イエスの時代もこういった修行や自傷行為的・自己満足的な行いが広く一般化していました。18節でヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々が断食しているという状況設定で物語は始められます。

もともとイエスはヨハネから洗礼を受けた(1;9)わけですから初代教会とヨハネ教団の結びつきは深かったと思われます。しかし、イエスが福音を宣べ始めたこの時点ですでにヨハネ教団との間には福音理解を巡っての亀裂が生じていたことが分かります。ヨハネ教団は禁欲的生活が軸にする教団でした。つまり、断食ということだけを考えれば、ヨハネ教団はファリサイ派の断食と大差のないところに位置していたということでしょう。

当時は律法の命じる年一回の断食の他に、さまざまな祈願・嘆き・悔い改めのために謙虚な行為や罪を贖うこととして考えられていました。ファリサイ派は週二回行っていたといいます。簡単に言えば、断食を行う者は正しく、行わない者は悪いということです。

しかし、イエスの教えはそうではないということなのです。自己目的だけを追い求めることに引きこもり、他者と関わりながら自分自身が変わられてゆくことを拒み、習慣化され崩れ落ちてしまった断食という行為にしがみついたあさまし

さ……。イエスは人間の現実をそんな二者択一の中に押し込めるのではないということを婚礼と古い服と古い革袋を例にとり、「いのち」を生きるとは何なのかを問い直すのです。

私たちは、明日もわからないいのちだから投げやりに生きるということに対し、明日もわからないいのちだからこそ真剣に生きるともいいます。しかし、明日もわからないということを怠惰に生きたり勤勉に生きるのも実は同じことなのです。そんな人間の投げやりや精一杯などというものと関係なしに、私たちは「いのち」を生かされているのです。この事実が目覚めるとき、人は初めて「いのち」に身を託して生きることができるのでしょ。この「いのち」への目覚めと委ねのことを、「いのち」のよみがえり、復活というのです。

礼拝を守るということは、何が私たちの内に形作られるのかということなのです。慣れ親しみすぎたがゆえに他者を排除さえしてしまう古い自分から、復活の「いのち」に生かされている新しい自分へと変えられてゆく信仰に主イエスは招かれるのです。